みんなの文芸

引間豐作選　投稿数25句

伝へ継ぐささら稽古の秋の夜　上日野沢　四方田利男

(評) 県の無形民俗文化財として、皆野椋神社の獅子舞が、十月七日の讀賣新聞の伝統芸能探訪欄に、後継者の育成等を含め研修会が創設され、保存と伝承が機能していると写真入りで大きく報道された。町にはその他の地域にも沢山の獅子舞が伝承されている。巻頭句の「ささら」も舞曲に合せて、細竹に鋸状の小さい山形を刻んだものを、別の竹棒の先を細かく割った篠(ささ)で摺り合せて音を出す。これを「ささらを摺る」と言い獅子舞の別称となっている。秋の夜を徹し鎮守の杜より舞いの笛や太鼓と「ささらを摺る」音が郷愁を誘う。

啄木鳥の叩く戸袋夜の明けて　三沢　新井　民子

差し交す朝茶をよぎる秋の風　金崎　設楽　武子

旅立ちや霧立ちのぼる山の襞　三沢　長谷河ソノ

萬本のコスモス棚田に揺れ休まず　皆野　大沼シヅ子

一粒の新米亡母の笑顔かな　皆野　塩田　千代

地芝居の子役の振りに笑わさる　下田野　藤原　道男

曾孫の生れし知らせや秋高し　三沢　新井　叶子

我がホーム桜紅葉に囲まるる　下日野沢　田端　マサ

うたた寝や月の世界の垣間見ゆ　下日野沢　五十嵐静枝

秋祭友と語るや茶碗酒　三沢　横田　龍雲

ふり向けば最北航路冬仕度　下田野　藤田　稔

秋の空ひときわ高く百舌の声　皆野　山下　昭二

俳句・短歌を募集

作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して企画課へお寄せください。

8日必着

1人1句、1首に限ります。

中田國太郎選　投稿数13首

裁ち縫ひの立ち居にこぼす糸屑の色とりどりに秋深むかな　皆野　笠原三江子

(評) かつては、女性の仕事の主流をなしていた和裁に、現在も真剣に取り組み生きている作者の、生活実感のにじむ、個性あふれた秀作である。この歌のポイントは「糸屑の色とりどり」によって深みゆく秋を感じた鋭敏な感覚である。生活の実感の中から生まれた作者の個性的な表現力に強く惹かれた。老若男女には、それぞれの生活があり、その生活の中での「心の揺れ」を詠むのが短歌の原点だと思うのである。新井氏の「別れの近し」と作者の主観を抑制した表現に感心。塩田氏の幼児の生き生きした姿の活写は、面白い。

十年の家族となりて暮したる盲導犬の別れの近し　皆野　新井　茂

幼児に負けるが勝ちの諺を諭す隙なく「勝つ」と言い張る　皆野　塩田　千代

獣らに喰はる栗の実あまたあり森の復活望みつ拾ふ　三沢　新井　民子

沖縄の過去の激戦に命捧ぐ義兄を悼みつ靖国に詣でる　三沢　新井　叶子

腰痛にくぐもる己が心似て雨にコスモス崩れ侘しき　金崎　山田　雅子

大根の若芽を害す虫共を勘弁なあと捻り駆除する　皆野　金子善次郎

孫の描くお月見の絵のカレンダー眺めて雨に籠もる十五夜　三沢　真下　杏子

親王様誕生ひたに待ちのぞみ新風吹きて祝福沸きぬ　皆野　新井　愛子

招待を受けて米寿の祝典え久し振りよねクラスの友と　皆野　吉岡　ヨシ

庭隅のモクセイ香るわずか横彼岸花咲くかくるるように　上日野沢　四方田利男

国民に借り過ぎ債務を注意する多重債務の国が導く　野巻　町田　忠次